2013 年度　国際キャリア開発プログラム「合宿セミナー」

ICS International Career Seminar

Utsunomiya University, Faculty of International Studies

宇都宮大学　国際学部
「国際キャリア開発」事前学習資料集

（「ワークシート」付属）

●「はじめに」

国際キャリア開発プログラム委員会　委員長
国際学部国際社会学科　教授
重田　康博

宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。

そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア開発プログラム」です。本プログラムは、宇都宮大学国際学部や栃木県の大学が中心になって 2004 年から毎年実施され、参加者数は過去 9 年間合計 1077 名（宇都宮大学で 436 名、他大学等で 641 名）となっています。

このプログラムの科目は、学生が働く意味やキャリア教育について考える「国際キャリア開発」、英語で全て授業を行う「国際実務英語」、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPO でインターンシップを行う「国際キャリア実習」の 3 科目、6 単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行い、講義は 1 科目 2 泊 3 泊の集中合宿方式で、キャリア実習は 80 時間で行います。本年度からは、新たに共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化(Globalization)」、「地域のグローバル化（Glocalization)」の 2 つの柱を立て、国際ビジネス、国際協力・国際貢献、多文化共生と日本、異文化理解・コミュニケーションの 4 つのテーマで分科会を構成します。講義ではその道のプロの専門家や講師を揃え、実習では国内・海外で魅力的で個性的な研修先を用意しています。3 科目すべての実習を勧めますが、選択的な受講も可能です。

「国際キャリア開発プログラム」は、毎年宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から優秀な大学生、社会人が多数参加します。皆さんもこのプログラムに参加して、国際キャリアについて一緒に学び、国際社会や地域社会への「キャリアパス」の可能性を探っていきましょう。

●「目　　次」

「はじめに」 …… i

「実施要領」 …… 1
「プログラム」 …… 2
「目標」と「ルール」 …… 3

「全体会」と講師の紹介（ワークシート） …… 4

「分科会」の成果発表に向けて …… 6
「全体発表」について …… 7
「ファシリテーター」について …… 8

「分科会」講師からの発題（ワークシート） …… 9
「パネルトーク」（ワークシート） …… 13

「分科会Ａ」と講師の紹介 …… 14
「分科会Ｂ」と講師の紹介 …… 16

「分科会Ｃ」と講師の紹介 …… 19
「分科会Ｄ」と講師の紹介 …… 22

「分科会Ｅ」と講師の紹介 …… 25
「分科会Ｆ」と講師の紹介 …… 28

「分科会Ｇ」と講師の紹介 …… 30
「分科会Ｈ」と講師の紹介 …… 32

「分科会１」（ワークシート） …… 34
「分科会２」（ワークシート） …… 35
「分科会３」（ワークシート） …… 36
「分科会４」（ワークシート） …… 37

「中間発表」の相互評価（ワークシート） …… 38
「中間発表」のチェックリスト（ワークシート） …… 39

「全体発表」準備（ワークシート） …… 40
「全体発表」の相互評価（ワークシート） …… 41

「研修成果と今後の課題」（ワークシート） …… 45
「リフレクション（ふりかえり）」（ワークシート） …… 47

●実施要領

１）科 目 名：国際キャリア開発～2013 年合宿セミナー～

２）テ ー マ：グローバル時代のキャリア形成を考える

３）日　　程：2013 年 8 月 31 日（土）～2013 年 9 月 2 日（月）＜２泊３日＞

４）会場・宿泊：コンセーレ（栃木県青年会館）
＜所在地＞〒320-0066 宇都宮市駒生１丁目１番６号
＜問合先＞TEL: 028-624-1417
＜ＭＡＰ＞ http://www2.ocn.ne.jp/~concere/access.html

５）プログラム：２頁を参照

６）参加定員：80 名

７）参 加 費：10,000 円（食費・宿泊費を含む）

８）主　　催：宇都宮大学国際学部
＜所在地＞〒321-8505 宇都宮市峰町 350
＜問合先＞TEL: 028-649-5172 FAX: 028-649-5171
E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

９）共　　催：大学コンソーシアムとちぎ

10）協力大学：白鴎大学

11）後　　援：栃木県／(公財)栃木県国際交流協会／いっくら国際文化交流協会／
JICA 地球ひろば

12）協　　賛：(一財)栃木県青年会館／(公財)あしぎん国際交流財団／
キリンビールマーケティング(株)栃木支社

●プログラム（敬称略）

１日目（８月３１日　土曜日）

時　　間	内　　容
09:00～09:30	受付
09:30～09:45	開講式・オリエンテーション
09:50～12:00	全体講義・ワークショップ
12:00～13:00	昼食
13:00～13:20	趣旨説明（分科会および全体発表のプレゼン方法の説明など）
13:20～14:50	分科会講師からの講義
15:10～16:40	パネルトーク「グローバル時代におけるキャリア形成について」
16:50～17:50	分科会１
	分科会「国際ビジネスＡ」講師：秋元信彦
	分科会「国際ビジネスＢ」講師：吉田智子
	分科会「国際協力・国際貢献Ｃ」講師：湯本浩之
	分科会「国際協力・国際貢献Ｄ」講師：甲斐田きよみ
	分科会「多文化共生と日本Ｅ」講師：若林秀樹
	分科会「多文化共生と日本Ｆ」講師：内藤靖
	分科会「異文化理解・コミュニケーションＧ」講師：田面木千香
	分科会「異文化理解・コミュニケーションＨ」講師：野口朝夫
18:00～ 18:20	チェックイン（事務局担当者より鍵を受領）
18:30～ 20:00	夕食・交流会

２日目（９月１日　日曜日）

時　　間	内　　容
07:30～08:20	朝食
08:30～12:00	分科会２
12:00～13:00	昼食
13:00～15:30	分科会３
15:30～17:30	分科会４（中間発表準備）
17:30～18:30	中間発表
18:30～19:30	夕食
19:30～21:30	全体発表準備

３日目（９月２日　月曜日）

時　　間	内　　容
07:30～08:20	朝食
09:00～12:00	全体発表
12:00～13:00	昼食
13:00～15:00	振り返り／意見交換／全体総括／アンケート記入
15:00～15:15	閉講式
15:30～	バスで宇都宮駅・宇大に移動・解散（現地解散も可）

●「目標」と「ルール」

１）目　標：

①　「働く」とはどういうことなのかについて考える。

②　自分と地域社会や世界とのつながりについて考える。

③　主体的に関わりたい分野を見つけ、今後の学びに向けた“きっかけ”を得る。

２）ルール：

①どんな意見も臆せず、積極的に発言しよう！

②一人ひとりが参加者の自覚をもとう！

③異なる意見を尊重するとともに自分の意見をもとう！

④自分独自の意見を述べよう！

⑤多様な発想を生み出す雰囲気をつくろう！

⑥時間厳守で行動しよう！

⑦安全、健康に注意をしよう。

３）ワークシート

全体会や各分科会は「コミュニケーションの場」です。各講師の講話や解説をよく聴いて、重要な点やキーワード、疑問点やコメントなどを本冊子の「ワークシート」欄（たとえば、全体会用６～７頁、分科会用 36～39 頁）に随時記入して下さい。

講師と参加者が意見や疑問を共有することによって、問題や課題をより深めていくことができます。また、「質問やコメントをすること」は話し手に対する敬意や感謝を表明することでもあります。

４）成績評価基準（宇都宮大学生のみ）

成績評価は、２泊３日の全日程への参加を条件として、出席状況（40%）およびレポート（60%）とする。ただし、レポートは「事前学習資料集」とし、ワークシート欄に「手書き」で記入したものか、別途「ワード印刷」したものとする。

なお、「ワード印刷」を希望する際は、各ワークシートを「国際キャリア開発プログラム」のウェブサイトから各自ダウンロードすること。提出先は「修学支援課」とし、提出期限は９月９日（月）午後５時（厳守）までとする。

●「全体会」と講師の紹介　（１日目　9:50～12:00）

１）講師プロフィール：田巻　松雄（宇都宮大学国際学部長）

1956 年生まれ。宇都宮大学国際学部長。筑波大学大学院社会科学研究科修了。社会学博士。1996 年より宇都宮大学国際学部に勤務。2008 年、国際学部が地域の国際化を推進する教育研究拠点として開設した多文化公共圏センターの初代センター長に就任。現在、外国人児童生徒支援を目的とする宇都宮大学 HANDS プロジェクト研究代表を務める。

２）講義の概要

「地域のグローバル化」と「地域からのグローバル化」に対応する「グローバル人材」育成の意義と課題をキャリアという視点に引き付けてお話しします。

３）ワークシート

【キーワード／キークエスチョン】

【疑問なこと・質問したいこと】

【コメント／自分で考えたこと　など】

●「分科会」の成果発表に向けて

１）発表準備：

分科会参加者の中でファシリテーターを決め、参加者の議論を促したり、意見の合意形成を図ったりするよう心がけよう。（「ファシリテーターの役割」（＊頁）を参照）

２）中間発表　（２日目の夕方）：

①最終発表の途中経過（未完成で良い）を発表します。二つの分科会がペアになり意見交換を行います。
②参加者及び講師からのコメントや質問を活用し、最終発表への改善につなげます。

３）全体発表（３日目の午前）：

分科会ごとに学んだことを最終日の「全体発表」で発表します。発表内容は次頁に記載してあります。

４）発表についての注意点：

①分科会のテーマについて不案内な人、あまり関心のない人が聞いてもわかるようなプレゼンを心がけよう。（専門用語は使わない、もしくは説明を入れる等）

②結論だけを伝えるのではなく、話し合いの過程（どういう意見や議論があったか）も伝えるようにしよう。

③聞き手にとってわかりやすい発表の構成・内容・方法を考えよう。

④話し方、発表資料の作成を工夫して、伝わりやすい発表を心がけよう。

memo

●「全体発表」について

１）発表時間等：　２０分（**発表１０分**、質疑応答５分、講評５分）

２）発表方法：　パワーポイントを使い発表。形式は自由。

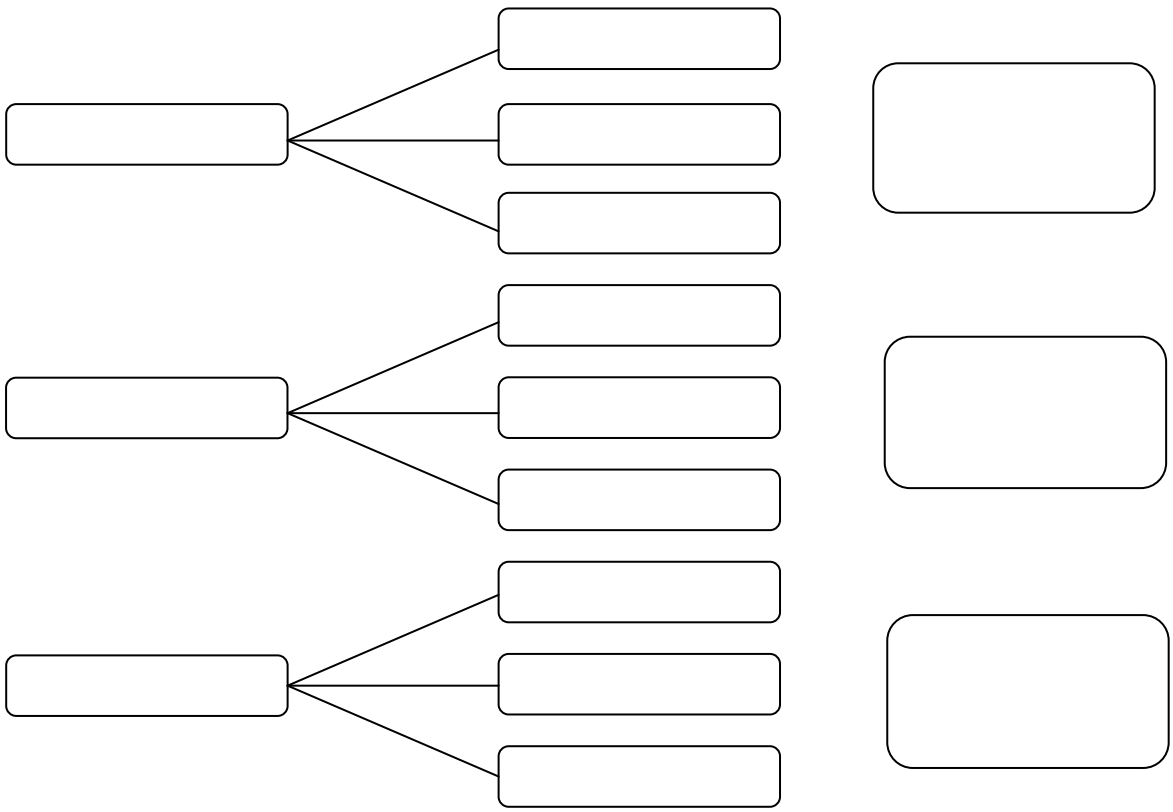
３）発表内容：　①「学んだこと」を３つ
②「なぜその学びが重要だと考えたのか（根拠）」をそれぞれ３つ
③「提言や行動計画（アクションプラン）」を３つ
※それぞれ３つを目安とするが、数の増減があってもよい。

４）備　考：

①アクションプランとは：参加者個人またはグループが今後実施したい行動計画。
②提言とは：社会に対する提言。（例：政策提言、特定のグループやコミュニティに対する提言等）
③分科会で提示された課題や問題点が難しく、解答や解決策が所定の時間内に見つからなかった場合には、「難解で解答は見つかっていない」と発表してもよい。ただし、その場合はどのような議論がされたかを発表すること。

５）全体発表の構成（参考）：

「学んだこと」　「なぜ重要だと考えたのか（根拠）」　「提言・アクションプラン」



●「ファシリテーター」とは

＜役割＞

・会議やプロジェクトの推進において、中立な立場を保ち、議論の交通整理をして参加者の能力を引き出し、舵をとる役割を担う人をファシリテーターと呼ぶ。
・ファシリテーターは決定権を持たないという点で、会議における議長やリーダーのような存在とは大きく違う。
・知恵とやる気を引き出す、コミュニケーションの場を創造し、中立な立場でプロセスを管理する役割となる。
・分科会のアウトプットを素晴らしいものとするために必要なインプットを議論の場に与え、それを順に従い話を展開していく。必要なインプットとは、分科会メンバーの意見や知識、経験であり、それを議論の場に引き出すこと。そしてそれらを分科会の主旨、メンバーの合意を得ながら分科会の目的に沿わせてプロセスを作っていくという役割を担う。

「聞き出す」

・分科会メンバーから目的に対する「網羅的な」意見を聞きだし、それをホワイトボード等に書き出し、会議メンバーが目に見える形で全体像を示しながら、メンバー間の合意（共通認識）を形成していく。
・受動的に聞くのではなく、能動的に聞き出すこと。普段発言をしないような人からの発言も促す。
・ファシリテーターは中立的立場の進行役ですから、自分の意見は発言しない。発言したとしてもメンバーの発言を引き出すための「呼び水」程度で、ファシリテーターはメンバーが思ったことをためらいなく発言できるような「場」を提供する。

「まとめる」

分科会メンバーは様々な立場、様々な性格・キャラクターを持っている。聞き出した意見をメンバー全員が眺め、ほんとうにそれだけか？他にはないかと網羅性を意識させながら「聞き出し」と「まとめ」を繰り返す。それにより共通認識が形成され、メンバーの一体感が生まれるようになる。

「合意する」

・「聞き出し」と「まとめ」の繰り返しを通じて形成された共通認識について特に何が重要か、重点事項は何かを導き、分科会の目的を達成するために必要不可欠な意見を選択する。
・出された意見をすべて実行すれば分科会のテーマは実現されるが、実際には様々制約もあり困難であることが多い。
・一番効果が現れると思われることは何かを選択することがとても重要になる。これを選択することが、網羅的な共通認識の中から発見された「真に追求すべき事項」が分科会メンバーによって合意されたものとなる。

●「分科会」講師からの発題（ワークシート）　（１日目 13:20～14:50）

各分科会講師からの発題に関して、キーワードやコメントなどを記入して下さい。

分科会Ａ講師：秋元　信彦		
キーワード１	キーワード２	キーワード３
memo		

分科会Ｂ講師：吉田　智子		
キーワード１	キーワード２	キーワード３
memo		

分科会Ｃ講師：湯本　浩之		
キーワード１	キーワード２	キーワード３
memo		

分科会Ｄ講師：甲斐田　きよみ		
キーワード１	キーワード２	キーワード３
memo		

分科会Ｅ講師：若林　秀樹		
キーワード１	キーワード２	キーワード３
memo		

分科会Ｆ講師：内藤　靖		
キーワード１	キーワード２	キーワード３
memo		

分科会Ｇ講師：田面木　千香		
キーワード１	キーワード２	キーワード３
memo		

分科会Ｈ講師：野口　朝夫		
キーワード１	キーワード２	キーワード３
memo		

●「パネルトーク」（ワークシート）　（１日目 15:10～16:40）

「パネルトーク」での各講師の発言や全体での議論のポイントを記入して下さい。

【各講師の発言・論点など】
【パネルトーク全体での主な論点・話題】
【疑問点・コメントなど】

●分科会Ａと講師の紹介（敬称略）

☆講師プロフィール

氏　名：秋元　信彦（あきもと・のぶひこ）
所　属：株式会社パン・アキモト営業本部長なんでも係
略　歴：
1979 年生まれ。栃木県黒磯南高校卒業。トラベルジャーナル旅行専門学校卒業。コンコーディアユニバーシティカリフォルニアに 1 年半の遊学（米国同時多発テロ発生の為、帰国）。2001 年、株式会社 HIS に入社。2007 年、株式会社パン・アキモト入社。2012 年、TREP（とちぎ良品エキスポートプロジェクト）立ち上げ。

１）仕事の内容・研究テーマ

当社の様な中小企業は、ひとつの職種だけを特化して仕事をする事はなかなか出来ないと思います。だからこそ、様々な事にチャレンジできるチャンスがあるのだと日々考えています。チャレンジすることに経験・年齢は関係ありません。私の本職は営業になりますが、配送もやれば店番・人事・経営企画等も行います。自身が行っている仕事の勉強をする事はプロとして当たり前の事ですがその自身の仕事の枠だけでなく、他の職種に係ることで視野も広がり、チャレンジしやすい環境が結果的に新しい物を考え出す仕事の意義へとつながっていると思います。

２）キャリアパス

私は 28 歳になり地元に帰ってくるまで、本や新聞を読む事の無い生活を行っていました。そんな男でしたので、学生時代は「部活一筋の勉強嫌い！別に書物を読まなくても（勉強しなくても）どうにかなるだろう！」と考えていました。それまでは「こんなもん」で生きていけると面倒な事から避けていた人間です。しかし、ある方との出会いで自身の考え方が変わり？その人に変えられ？た事によって、勉強する事・本を読む事の大切さを学びました。現在、栃木県庁・栃木県内の企業数社と共に「栃木の良いものを簡単に輸出する仕組み作り」を TREP（とちぎ良品エキスポートプロジェクト）として動き出しました。

３）分科会の内容：「前例が無い！だからやってみよう！」

当たり前の事ですが「始めなければ始まらない」。又、実際に始めてみても「続かない」等で諦めてしまう事は多々あると思います。　当社のパンの缶詰が何故開発されたのか？開発当初、売れない時期が続き何度も諦めようとしましたが、何故続けることが出来たのか？栃木の田舎のパン屋が開発をした「パンの缶詰」がどの様にして NASA に認められる商品になったのか？当社が紹介されたテレビ番組（30 分弱）を最初に観てもらい、当社創業者から、当社創業時の想いを受け継いだ現社長が、東日本大震災に取った行動とは？
ディスカッション形式でお話を進めさせて頂きたいと思います。

４）キーワードリスト：

当社のホームページを事前に確認をしておいてください。

５）参考資料等：

当社ホームページ内の「新着情報」に当社が近々で紹介されたメディア情報等が載っております。

memo

●分科会Ｂと講師の紹介（敬称略）

☆講師プロフィール

氏　名：吉田　智子（よしだ・ともこ）
所　属：日本コカ・コーラ株式会社　広報・パブリックアフェアーズ本部　コミュニティコネクションズ　マネジャー
略　歴：
1977 年生まれ。津田塾大学卒業後、ニューヨーク大学大学院で国際地域保健教育を専攻（公衆衛生学修士号）、IOM カンボジア事務所インターンを経て帰国。民間企業で広報・社会貢献活動を担当する傍ら、国内外のエイズ対策キャンペーンの企画実施、助成金の審査、企業での社内啓発・支援活動などに広く取り組む。

１）仕事の内容・研究テーマ

・企業による社会貢献活動の企画・実施
・個人として、HIV/AIDS の国内（外）対策に関する諸活動

＜面白さ・意義＞

（会社での仕事）
- 仕事においてミッションが感じられること
- 広く一般の人に社会課題を考えてもらうきっかけを作ることができること
- 社内のリソースを使い、インパクトを高められる可能性があること
- 社内の人を巻き込むことで、身近な人への啓発が出来る可能性があること

（HIV/AIDS に関する活動）
- “先進国”“途上国”どちらにもある課題で、個人（自分）の価値観や行動の問題であると同時に、社会正義の問題でもあること。
- 政治も経済も社会も文化にも関わりがあり、価値観／常識を問い直されること

２）キャリアパス

津田塾大学
学芸学部国際関係学科。
ミュージカル『RENT』と出会い、HIV/AIDS とその社会運動に関心を持つ。
ミュージカルの専門学校と W スクール。卒業後、留学まで外務省でバイト。

ニューヨーク大学
教育学大学院国際地域保健教育学専攻（公衆衛生学修士号）。
国際保健プロジェクト／健康教育に関するトレーニング。
市内の各 NGO が提供するワークショップ（性教育／Harm Reduction）や、
世界のエイズ対策に関する社会運動に参加。APICHA、LESHRC でインターン。

IOM Cambodia

インターン。カンボジア国内のエイズ対策の現状アセスメントを実施。
政府、国際機関、国際 NGO、ローカル NGO、病院でヒアリングしたことで、
１つの国のエイズ対策を概観できた。国際機関での仕事について。

サンスター(株)

広報 10 年。社会貢献活動も担当し、CSR プロジェクトのリーダー。４年目にユースとして活動。エイズ対策支援『Live Positive』『ネイルにレッドリボンを』を立ち上げ。日本初のエイズ・ユース・フォーラムや、『RESPECT Campaign』の実施、国際的な社会運動、NGO ボランティア等、ユース当事者＋αとして活動。

コカ・コーラ

転職。外資系の新たな企業文化・メンバーの中で、大学院時代に学んだ専門分野＋財団活動などを勉強中。

３）分科会の内容：HIV/AIDS から考える世界と日本
～自分たちのエイズ・キャンペーンを創ってみよう～

目的は二つ。HIV/AIDS をサンプルに、世界の課題と自分とのつながりを考えること。そして、自分たちのエイズ・キャンペーンを創ってみること。動きましょう。

・HIV/AIDS は、大学生にとって身近なテーマ。「病気の誰か」の話ではなく、自分たちの社会と個人の価値観や常識、日本と“途上国”の関係、恋人や身近な人との関係、性とセクシュアリティ、性教育、自分たちの権利、など、色んなことを考えるきっかけになると思います。
・分科会では、まず HIV/AIDS に関する世界と日本の現状を学び、今まで当たり前だと思っていた“常識”について再考します。アウトプットとしては、同世代の大学生に向けたエイズ／キャンペーンを作っていければと思います。

４）キーワードリスト

性教育／当事者性／HIV/AIDS／社会規範／ピア･エデュケーション／Vulnerable population／セクシュアリティ／性の健康（セクシュアル･ヘルス）／性感染症・STD または STI

５）参考資料等（全部読めなくても OK です）

・ 林達雄『エイズとの闘い　世界を変えた人々の声』岩波ブックレット No.654、岩波書店、2005 年。
・ 池上千寿子『若者の気分　思いこみの性、リスキーなセックス』岩波書店、2011 年。
・ エイズ＆ソサイエティ研究会議『エイズを知る』角川書店、2001 年。
・ 宮田一雄『エイズ・デイズ　危機と闘う人びと』平凡社新書、2000 年。
・ 菊池修『MONSTER』リトル・モア、2008 年。※写真集

memo

●分科会Ｃと講師の紹介

☆講師プロフィール

氏　名：湯本　浩之（ゆもと・ひろゆき）

所　属：宇都宮大学　留学生・国際交流センター　准教授

略　歴：

大学卒業後に在中央アフリカ共和国日本大使館に在外公館派遣員として２年間在勤。帰国後、ＮＧＯ活動推進センター事務局次長、開発教育協会事務局長、立教大学文学部特任准教授などを経て、この４月より現職。

１）仕事の内容・研究テーマ

「開発教育」って聞いたことがあるでしょうか。「教育」とは言っても、学校の授業の中で行われてきたものではないので、聞いたことのある人は少ないと思います。私がこの言葉に出会ったのは、今から 20 数年も前のことになりますが、以来、市民組織（NGO/NPO）の専従スタッフとして、市民による国際協力活動や「開発教育」と呼ばれる教育活動の普及推進を長く仕事としてきました。そのため「ご専門は何ですか？」と問われれば、「国際教育論（開発教育やグローバル教育）」や「市民組織論（NGO/NPO やボランティア活動）」と答えるようにしています。

私にとっては、いわばライフワークとも言える「開発教育」ですが、もともとは 1970 年代に欧米で始まった教育活動です。その当時“第三世界”と呼ばれていたアジアやアフリカなどの「南」の国々や地域では、多くの人々が深刻な飢餓や貧困に苦しんでおり、各国の政府やＮＧＯ、そして国連などの国際機関が国際協力に取り組んでいました。ところが、一部の国連機関や欧米のＮＧＯが、ただ海外に援助資金や援助物資を送るだけではなく、「南」の過酷な現状や深刻な問題を“援助する側”にいる欧米諸国の人々に伝え、国際協力や国際貢献のあるべき姿を考えていくための教育・啓発活動を始めたのです。こうした活動がやがて様々な教育現場でも行われ、「開発教育」と呼ばれるようになったのです。

研究テーマとしては、英国や大陸欧州における開発教育やグローバル教育の歴史研究や政策研究のほか、これら教育実践の中で重視される「参加型学習」と、住民主体のコミュニティ開発の現場で注目される「参加型開発」との比較研究を試みています。今日、日本の教育や学校・大学のあり方がますます厳しく問われるようになっています。伝統的な教育学や教育制度の枠組みの外で、研究や実践が進められてきた「開発教育」や「参加型学習」の知見や経験の中に、今後の教育改革や学校・大学改革に向けたヒントを見つけたいと考えています。

２）キャリアパス

今でこそ大学に職を得ている私ですが、40 代になるまで大学教員になるとは思ってもいませんでした。過去 20 数年余り、市民組織（NGO/NPO）の職員や役員として仕事をしてきましたが、そこでの実務や実践の延長線上に今の私があります。

＜1980 年代：20 代＞

英語の教員を志望して某大学の英文学科に一浪の末に入学。東京 YMCA でのボランティア活動に没頭。小中高生を対象に、夏休みは海や山での野外活動、冬休みと春休みにはスキーキャンプなどを企画運営。大学４年の夏から１年間休学。現在では NPO 邦人

の国際文化青年交換連盟日本委員会（ICYE-Japan）を通じて、米国オハイオ州に派遣。現地のキャンプ場でボランティアの駐在スタッフとして活動しました。

大学卒業後、外務省在外公館派遣員として、在中央アフリカ共和国日本大使館に２年間在勤。最貧国の過酷な社会状況や日本の ODA（政府開発援助）の現実を目の当たりにしました。

帰国後、再就職のため JICA（当時の国際協力事業団）の中途採用や某 NGO の海外駐在員に応募するも不採用。しかし、ある時かかってきた１本の電話がきっかけとなり NGO の世界に足を踏み入れることになりました。

＜1990 年代：30 代＞

当時の NGO 活動推進センターで、調査研究や政策提言、国際会議や「全国 NGO の集い」、職員研修や市民講座、広報やマスコミ対応などを担当。1996 年、NGO の立場から教育に関わりたいと当時の開発教育協議会へ転職。政策提言や調査研究、教材開発や各種研修などを担当。国際協力や国際理解をテーマとする研修会や市民講座の講師やファシリテーターとして、全国各地に出かけるようになりました。

＜2000 年代：40 代＞

NPO 法人開発教育協会の事務局長としてマネジメント業務に追われる一方、大学・大学院から「NGO/NPO」や「ボランティア」、あるいは「開発教育」や「総合的学習」などをテーマとした非常勤講師の依頼が増加。大学教育における開発教育や参加型学習の実践に関心が募る。立教大学大学院に入学し教育学を専攻。博士課程を中退して、立教大学文学部の特任教員（５年契約）に採用されました。

＜2010 年代：50 代＞

宇都宮大学に着任。「国際キャリア開発」や「グローバル人材養成」を担当することに。

３）分科会の内容：「何のための国際協力？援助の“功罪”と寄付の“是非”を考える」

最近では、国際協力に関わる市民組織（NGO/NPO）の活動に参加する学生や社会人が少なくありません。将来、国連機関や政府機関で国際協力に関わりたいと考えている人もいるでしょう。しかし、気候風土や生活様式をはじめ、言語や宗教、価値観や人生観などを異にする人々とともに、私たちが活動することはけっして容易なことではありません。海外の現場では、日本社会での常識や通念が覆されるのはもちろん、“援助する側”の善意や熱意が逆効果を生んでしまうことすら起こりえます。国際協力や国際貢献の必要性を語ることは簡単ですが、過去の歴史を振り返れば、“援助”の功罪や“寄付”の是非が議論されてきました。

この分科会では、このような問題意識から出発して、国際協力や国際貢献、“援助”や“寄付”をめぐる問題点や課題に着目しながら、今後この分野に関わっていく上での各自のキャリア形成の課題について検討したいと思います。

１日目夕方：参加者の自己紹介や問題意識の共有。２日目に向けた準備・導入。
２日目午前：ワークショップ１「“国際協力・国際貢献”って何だろう？」
　　ワークショップ２「“援助”する前に考えよう！」
２日目午後：ワークショップ３「“される側”から見たボランティアとは？」
　　ワークショップ４「自分には何ができ、何ができないのか？」

※参加者の人数や関心によって、ワークショップの内容を変更する場合があります。

４）キーワードリスト

国際協力・国際貢献／援助・寄付／NGO･NPO／ボランティア

５）参考資料等

日本の国際協力や国際交流の現状や課題を概観し、これらの分野を担ってきた関係者の体験や今後の人材への期待や課題を紹介した入門書として、毛受敏浩・榎田勝利・有田典代監修の「国際交流･協力活動入門講座Ⅰ～Ⅳ」（発行：明石書店）を紹介します。

第Ⅰ集『草の根の国際交流と国際協力』（2003 年）
第Ⅱ集『国際交流の組織運営とネットワーク』（2004 年）
第Ⅲ集『国際交流･国際協力の実践者たち』（2006 年）
（分担執筆）湯本浩之「知ったことを伝えるために」（pp.175-194）
第Ⅳ集『「多文化パワー社会」：多文化共生を超えて』（2007 年）

memo

●分科会Ｄと講師の紹介（敬称略）

☆講師プロフィール

氏　名：甲斐田　きよみ（かいだ・きよみ）
所　属：オーピーシー株式会社　海外コンサルタント部
コンサルタント
愛知淑徳大学大学院グローバルカルチャーコミュニケーション研究科　非常勤講師（ジェンダーと開発）
略　歴：
現在、開発コンサルタント会社にコンサルタントとして所属。東京都庁、青年海外協力隊（ニジェール：家庭科教師養成学校の教師）、国連ボランティア（レソト：職業訓練学校の教師・村落部の女性の組織化および収入向上活動支援）、JICA ジュニア専門員（ジェンダーと開発）、JICA 専門家（ナイジェリア：女性の生活向上支援を実施する行政官の能力向上支援）を経て現職。ジェンダー、コミュニティ開発を専門とし、アフリカで女性の生活向上及び行政官の能力向上支援に携わる。名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程満期退学。

１）仕事の内容・研究テーマ

アフリカでの開発協力の現場において、女性の生活向上・貧困削減・コミュニティ開発の分野で携わってきました。草の根レベルの女性達が望むような生活はどのようなものか、その実現のためには何をどうすればよいのか、現場で現地の人々と共に考え実行に移していくことは大変やりがいがあります。現場では様々な問題に直面しますが、当事者と一緒に考えて解決策を探すようにしています。自分で収入を得て、何かを決定する機会がなかった女性達が、スキルを身につけ収入を得て、自信をもって次の活動に取り組むようになる事例をいくつも体験してきたことが、ジェンダーと開発の分野で開発協力に取り組む原動力となっています。

研究の面では、アフリカの現場での活動を基に、世帯内の女性の意思決定への関わり方、世帯内での資源の分配・管理について探求しています。女性が自分で収入を得るようになる事には地域により様々な障壁があります。教育レベルの低さ、家事労働の負担、女性が外で活動することを阻む文化的・社会的慣習、女性に対する暴力などです。このような状況で女性が収入を得るようになっても、その収入を女性自身が管理できないこともあったり、世帯に必要な衣食住などに支出してきた夫が支出額を減らしたり、夫が暴力を振るったりという事例もあります。女性の世帯内での意思決定力の向上と自ら収入を得ることとの関わりについて、開発協力の現場に還元できるよう研究しています。

２）キャリアパス

大学では社会学を専攻し、卒業後はコミュニティ開発への関心から地方自治体職員として東京都庁に勤務。同時に国際協力 NGO でボランティアとして携わり、自分が実際に開発協力の現場で、特に女性の生活向上支援の分野で働きたいと思うようになりました。青年海外協力隊に「手工芸」という職種があり、女性が洋裁や編み物のスキルを身につけることで収入を得ることを支援する可能性を知り、都庁に勤務しながら夜間に洋裁学校に通

い、洋裁・手工芸のスキルを学びました。その後、青年海外協力隊合格を機に勤務を辞めました。青年海外協力隊では西アフリカのニジェールで家庭科教師を養成する学校および洋裁・手工芸を学びたい女性のためのセンターで手工芸の講師を務め、女性が収入を自分で得る手段を身につけることの重要さを実感しました。

青年海外協力隊後は開発協力の世界で仕事をするためには修士号の取得が必須であることを感じ、海外留学の準備のため英国の開発学部のある大学の語学コースに在学し語学力を高めるとともに大学院の情報収集をしました。語学留学後は、国連ボランティアとして南部アフリカのレソトで職業訓練校のテキスタイル部門の教師および村落部の女性の組織化支援・収入向上活動支援に取り組みました。その後、英国の大学院で開発学を学び、特にジェンダーと開発について学びました。帰国後は JICA のジュニア専門員制度（JICA の本部及び在外での業務を通して学ぶ研修制度）により JICA 企画部でジェンダー平等推進に関わる業務に携わりました。またナイジェリアの連邦女性省付属機関にジェンダー課題アドバイザーの専門家として勤務し、行政官の能力向上に取り組みました。ジュニア専門員の期間後は、JICA 技術協力プロジェクトの長期専門家（ジェンダーと開発）としてナイジェリアで女性の生活向上に従事しました。

合計 4 年間のナイジェリア駐在を通じて、女性が収入を得ることと世帯内での意思決定への関わりについて研究を深めたくなり、名古屋大学大学院国際開発研究科の博士後期課程に入学し研究に取り組みました。本年 5 月より開発コンサルタント会社に所属し、再びナイジェリアの女性の生活向上プロジェクトに従事しています。

３）分科会の内容：「ジェンダーの視点から考える開発協力」

開発協力においてジェンダー視点を持つことが重要と言われています。開発協力の場では様々な課題がありますが、これらを「ジェンダーの視点で見る」とはどういうことでしょうか。本分科会では、講師がアフリカにおける開発協力の現場で直面してきた課題を事例として、参加者が開発協力の現場に開発ワーカーとして活動していると仮定して、置かれている状況の中で課題の解決に向けて、どう取り組むことがベストか、グループワーク、全体ディスカッションを通して理解を深めていきます。

４）キーワードリスト

ジェンダーと開発、性別役割分業、ジェンダー分析、WID アプローチと GAD アプローチ

５）参考資料等

田中由美子、大沢真理、伊藤るり編著『開発とジェンダー：エンパワーメントの国際協力』国際協力出版会、2002 年。第 1 章から第 4 章。

memo

●分科会Ｅと講師の紹介

講師プロフィール

氏　名：若林　秀樹（わかばやし・ひでき）
所　属：宇都宮大学国際学部　特任准教授
略　歴：
1962 年生。栃木県公立中学校教諭を 24 年勤め、内 15 年間は外国人児童生徒教育に携わる。栃木県内の外国人児童生徒教育分野での支援者ネットワーク構築、初期指導教室設置の提案、不就学対策などの活動に傾倒。2005 年より宇都宮大学重点推進研究「外国人の子どもたちの教育・生活環境をめぐる問題」に関わり、2008 年より「外国語特別講義Ｉポルトガル語非常勤講師」を経て、2010 年 4 月より現職。1997 年 4 月から 2011 年 3 月まで栃木県警民間通訳人。著書は『教員必携　外国につながる子どもの教育』シリーズ（宇都宮大学 HANDS プロジェクト刊）ほか。

１）仕事の内容・研究テーマ

私は宇都宮大学国際学部に所属し、文部科学省特別経費事業である「HANDS プロジェクト」メンバーとして、外国人児童生徒の教育問題に取り組んでいます。

日本には、日本語の力が不十分もしくは生活環境の理由などで、高校進学はじめ自分のキャリア形成がままならない外国人の子どもが多く存在します。かれらを支援する活動の種類は、①進学ガイダンスなどの情報提供や学習教材・資料の提供など、子どもや保護者への直接支援につながる活動、②学校教員のスキルアップや、行政の体制改善など子どもを取り巻く環境整備にあたる活動、③社会に広く外国人児童生徒教育問題を認識してもらい、多文化共生社会の構築に貢献するための活動、の大きく 3 つに分かれると考えています。

HANDS プロジェクトは上記すべての分野において事業を展開していますが、私は学校現場の経験を生かした教員ネットワーク作りや研修事業、支援に関する手引きや資料作成に特に力を注いでいます。世間では時に謎めいて語られる学校現場ですが、組織の仕組みや教員の体質などを理解し、また現場のニーズやその効果的な提供手段を知る自分が担うことのできる仕事がたくさんあると考えています。

とは言え、外国人児童生徒教育が取り上げられて 20 年が経ち、現場の状況や社会の認識も様変わりしてきました。自らの経験に甘んじることなく、これからも情報発信し続けられるようスキルアップに励まなければならないという緊張感も常に感じています。

２）キャリアパス

公立中学校教諭を経て大学教員（しかも専門は教育分野）というと、一見マジメ一筋のキャリアと勘違いされそうなので、ここである程度正体を明らかにしなければなりません。

英文学を専攻し教員免許の取得目的もありましたが、大学時の頭の中は音楽のことでいっぱいでした。当時まさには怖い物無しで「自分の音楽で世の中を変えてやる」くらい考えていました。自らレコード会社との関係を作り、学生の傍ら「次代を担う作曲家」を気取り大学へもろくに通わない生活が続きました。留年の末に「ちゃんと生計立てなきゃ」と思い立ち地元栃木の教員採用試験を受験、折しも時代はバブル前夜で世のエリートは大

企業に流れ、私のような者も教員試験に一発合格。「とりあえず」の感覚で教員としてのキャリアをスタートさせました。

そんな私にとって中学校教員としての生活は、特に「精神的に」厳しいものでした。常に「集団」を重んじるやり方や、「少数派」を認める意識の弱い体質に激しい反感をおぼえ、できる限りそれらの風潮に反発もしました。間違いなく「変わり者」のレッテルを貼られていただろうし、久しぶりに会った教員仲間などからは、「あれ、まだ(教員)やってたの？」と本気で言われました。当然、生徒や保護者からの印象も好き嫌いが真二つに分かれ、一般的に言うところの「いい先生」とはほど遠かったと思います。

人生の「キッカケ」は音もなく目の前に表れ気づかぬうちに自分の中で広がります。勤務地に外国人が急増し外国人児童生徒教育という分野に出会ったのは教員 10 年目でした。新分野というのは人に指図されず創意工夫ができるのが魅力でしたが、最も私の心をとらえたのは親に連れられて日本という異国で生きることになった子どもたちが必死になって自分探しをする姿でした。それからの私は、知識の吸収と目の前の子どもを支援することに没頭しました。それまで関わった方々には申し訳ないのですが、この時初めて「仕事が楽しい」と思うことができ、教員になった自分自身をようやく肯定することができました。

やがて宇都宮大学でも外国人児童生徒教育分野の研究が始まり、出会いを機に相互協力が進みポルトガル語の非常勤講師となるなどその関係は深まりました。平成 22 年度、宇都宮大学が文部科学省特別経費事業である「HANDS プロジェクト」を発足させるのを契機に、平成 22 年 3 月末公立中学校教員の職を辞し現職となりました。

大学時代は就学態度の悪さから大学からの呼び出しで「あなたのような学生は退学してほしい」と言われ、教員になってからは「あれ、若林君まだ先生やってたの？」と言われていた私が、端くれながらも大学に身を置いて仕事をしていると言う現実は、確かに不思議でなりません。しかし一方、キャリアの積み重ねに「偶然」など存在せず、音楽をやめて帰ってきたことも、とりあえず教員になったことや体制に反発しながら続けたことも、全てが「必然」として「今」につながっていると考えています。私が外国人の子どもたちを通して初めて自分を肯定できたように、誰もがそれぞれの「必然」に導かれて自らのキャリアを形成できると思います。広い世界から見ればあまりにも小さな事ですが、「自分」という小宇宙を作り上げる楽しさは一人一人の中に潜在しているはずです。今回の分科会では、就職難と言われる現代において、自分探しとは何なのかについて、参加者の皆さんの考えを存分に聞きたいと願っています。

３）分科会の内容：「外国人生徒から教わったこと」

〈テーマの概要〉

・日本における外国人児童生徒教育の現状を把握し課題意識を持つ。
・「身近な国際化」を進めるための学校や社会のあり方について議論する。
・多文化化する今後の社会における職業観や人生観について討論する。

〈テーマの背景にある問題意識〉

日本に暮らす外国人の子どもや家族から、「日本の学校はイジメがあるから怖くて入りたくない」という意見を聞くことが多い。外国人にとって不安な学校は、日本人の子どもにとっても同じだと考えると、少数派として不安を抱えているのは外国人だけでなく皆同様であることに気づき、そこに様々な論点が浮かび上がる。学校は社会の縮図ととらえ置き換えれば、外国人にとって不安な社会は日本人にとっても同じであるという仮説が成り立つ。ますます進む日本の多国籍化・多文化化を鑑み、「内なる国際化」を進めることの重要性が浮き彫りになる。

〈分科会の進め方〉
詳細は参加者の実情を見て最終決定しますが､大まかに次のような内容を予定しています。
１.「中学校教員の仕事」と題し、職務全般やあまり知られない現実などを紹介します。
２.「外国人児童生徒教育のこれまで」と題し、教育現場の取り組みや課題を紹介します。
３.「こんな時どうする」と題し、授業中・進路指導・生活面など、学校現場で遭遇するいくつかの場面を設定し、参加者が教員になったつもりで考え協議します。
４.学校における外国人児童生徒教育問題を社会全体の問題に置き換えて考察を試みます。
５. 多国籍化・多文化化が進む日本におけるキャリア形成の在り方について討論します。
６. 外国人児童生徒教育から発展させた、社会全体の「内なる国際化」の提案を準備します。

４）キーワードリスト

○外国人児童生徒教育・・・対象範囲や支援期間などまだ基本的な共通認識が未だ不十分です。
○多数派と少数派・・・学校でのイジメを始め社会問題の重要な要因の一つであると考えられます。
○多文化共生・・・この用語のスケールに惑わされず、個人が身近な接点に気づく力と動く力が大切です。

５）参考資料等

○外国人登録統計（総務省統計局）
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001089591
○日本語指導が必要な児童生徒の受入状況に関する調査結果(文部科学省)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/04/__icsFiles/afieldfile/2013/04/03/1332660_1.pdf
○外国人児童生徒教育の手引き（文部科学省）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm

memo

●分科会Ｆと講師の紹介（敬称略）

☆講師プロフィール

氏　名：内藤　靖（ないとう　やすし）
所　属：株式会社テラクリエーション代表取締役
　　公益社団法人栃木県経済同友会国際化推進
　　委員会委員長
略　歴：
　1960 年長野県生まれ。東海大学工学部経営工学科卒業後、計測器開発ベンチャー企業に就職、主に本田技術研究所向けのデバイス性能試験システムの開発及び、システムエンジニアリングを担当。America Honda Motor Co., Inc.、ルノーサムスン自動車などで現地業務に従事。その後独立、1998 年(株)テラクリエーションを設立現在に至る。2011 年より（公社）栃木県経済同友会・国際化推進員会委員長。「アジアを中心とした観光客誘致（2011 年度～2012 年度）」、「グローバル人材育成（2013 年度～2014 年度）を担当。

１）仕事の内容・研究テーマ

（公社）栃木県経済同友会は県内の企業経営者と、県内に支店のある上場企業の支店長など、約２８０名の会員から構成される団体で、栃木県の経済社会問題や地域振興策に関する調査研究をすすめ、栃木県の総合的な発展と産業界の一層の活性化に貢献する団体です。

経済同友会には１０の常設委員会があり、その中の一つ、国際化推進委員会では栃木県への外国人観光客誘致に関する調査研究を行い、本年６月栃木県知事に「とちぎの観光産業を感動産業に」という提言書を提出しました。

また、平成２５年度からは「グローバル人材育成」をテーマに宇都宮大学をはじめ、大学コンソーシアムとちぎとの連携にて調査研究を進めております。

２）キャリアパス

1960 年長野県生まれ。東海大学工学部卒業後、計測器開発ベンチャー企業に就職し、主に本田技術研究所向けのデバイス性能試験システムの開発及び、システムエンジニアリングを担当。

American Honda Motor Co., Inc.、韓国ルノーサムスン自動車などで現地業務に従事。その後独立、株式会社テラクリエーションを設立。

平成２３年より（公社）栃木県経済同友会・国際化推進委員会委員長。調査研究テーマ：平成２３年～２４年度「アジアを中心とした観光客誘致」、平成２５年～２６年度「グローバル人材育成」。

３）分科会の内容：「観光まちづくり」

①日本の観光の現状と主要施策について。
②各地の具体的な取り組み紹介。
③観光を核とした地域の再生と活性化とは。
④観光まちづくりにおけるあなたの役割について考えてみましょう。

４）キーワードリスト

観光まちづくり

５）参考資料等

観光庁ＨＰ：https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/index.html
おぢか観光まちづくり公社：http://ojika-stay.jp/company.html
四万十ドラマ：www.mlit.go.jp/common/000213063.pdf
別府ハットウ・オンパク：http://japan.onpaku.jp/group2?disp_group_id=13
大田原グリーンツーリズム：http://www.ohtawaragt.co.jp/index.html

memo

●分科会 G と講師の紹介（敬称略）

☆講師プロフィール
氏　名：田面木　千香（たものき　ちか）
所　属：下野新聞社　社会部　記者
略　歴：
1980 年岩手県生まれ。1999 年宇都宮大学国際学部国際社会学科入学。中村祐司研究室。卒業後、下野新聞社に入社。記者としては足利総局、くらし文化部、政経部県政担当、日光今市総局に勤務。現在の社会部社会班では、事件・事故の取材と、主に労働･教育分野を担当している。

１）仕事の内容・研究テーマ

仕事は、県内または県民を対象とした取材と記事の執筆です。
記者の面白さは、「新聞記者」の肩書で、いろいろな人に会って話を聞く機会に恵まれる点です。首長や議員、大企業の社長や芸能人にも会え、警察への取材もできます。取材が楽しい半面、ある程度限られた文量の中で伝えたいことを書く難しさはありますが、こうして記事を書くことが、読者に役立ったり社会をよりよい方向に導いたりするのだと、信じています。
この４月から、社会部社会班で主に労働・教育分野を担当し、労働災害や障害者雇用について取材しました。今後、子育てとの両立に悩む女性の働き方について、取材していきたいと思っています。

２）キャリアパス

入社後の部署は、プロフィールの通りです。配属部署の希望は必ずしも叶いませんが、部署によって取材対象などが異なり、それがむしろ新鮮で楽しく、記者としての幅を広げることにもなったと思います。
今、担当する労働・教育分野は、自ら希望しました。複数部署をたどる中で、関心を強めていったところもあると思いますが、自身の経験によるところが大きいと思います。明るい記憶のない就職活動や、社会人になっても働く意義を見付けられない苦しさ、女性の働き方への興味は、年齢を重ね、出産・育児を考える年になったことから来ていると思います。

３）分科会の内容：「新聞とは、新聞記者とは？：地方紙記者 10 年の経験から」

大きく３つを取り上げます。

【新聞の成り立ち】
記者が取材して書いた記事は、いくつかの工程を経て紙面に掲載されます。どんな風に取材し、原稿を書き、また掲載されるのか、お話しします。

【新聞を読み解く】
新聞が向き合う社会事象を、どう捉えるか、考えてもらいます。

どんな事象も、見方がひとつということはありません。にも関わらず私たちは、一側面を捉えて、その事象を分かったつもりになってしまいがちです。実際の記事を通して、立場が違えば見方も違うことを実感してもらい、物事との向き合い方を考えてもらおうと思います（実際の記事は、鹿沼クレーン車事故の裁判記事を予定しています)。

また、これを踏まえ、実際に取材、執筆を体験してもらいます。取材対象は検討中です。

【これからの新聞】

ネットメディアが勢いを増す中、新聞はどう生き残っていけるのか。下野新聞でも始まったツイッターなど、新聞社が行うネットの取り組みを紹介しつつ、皆さんと一緒にこれからの新聞を考えたいと思います。ネットにばかり偏らず、地方に特化した地方紙の役割についても考えたいと思います。

４）キーワードリスト

・地方に根差して働くこと
・これからの新聞

５）参考資料等

当日配布のプリントなどで対応予定です。

memo

●分科会Ｈと講師の紹介（敬称略）

☆講師プロフィール

氏　名：野口 朝夫（のぐち・あさお）
所　属：野口朝夫建築設計所 代表
略　歴：
　早稲田大学で建築史を学び、吉村順三設計事務所にて建築設計に携わる。1982 年 NGO ラオスの子どもに絵本を送る会（現 特活ラオスのこども）を設立、事務局長として運営にかかわる。また設計事務所を自営し、主に住宅設計に携わりながら、専門学校、大学にてインテリア・住空間を教える。現 日本デザイナー学院校長。

１）仕事の内容・研究テーマ

卒業後勤務した設計事務所で、住宅設計の基本に携わるなか、いつも感じたのは「住空間」とは何だろうかということでした。事務所では住空間、生活スタイルに関し、建築家がイニシアチブを持つ指向性がつよく、施主を強くリードして空間をまとめるのが普通でした。一方、当時も建築メディアでは「新しい」「目だつ」住空間が好んで取り上げられ、優れた建築 ＝メディアに載るものとの感さえあり､生身の人間の日常生活はそんなに激しく変化しないと思っている私には、違和感がありました。

その後設計事務所を自営するようになり、住空間を作り上げてゆく楽しさに魅了されます。設計を依頼する方（施主）は、自分の生活に関し強い主張を持っている人もいますが、整理されないまま、矛盾する思いを抱えての設計依頼が普通です。また、メディアに載っているように演じたいと期待している人もいます。それら様々な施主の思いから本音を引き出し、整理し、予算や法律の制約の中で、優先順位を決め、施主にとって快適で満足がゆく生活を提供できに作り上げていくことは、共同作業として大変楽しく、コミュニケーションが建築家の仕事の全てだとさえいえる部分です。

この作業の中、人の好みはずいぶんと違うことに気付かされました。明るい部屋を好む人、いやこれでは明るすぎると感じる人。人の気配をいつも感じていたい人、１人のスペースにこもりたい人など、空間への要求は様々です。このような経験から、人の生活に対するイメージは千差万別でどれが正しいとかいえるものではないことを知りました。

加えて、アジアをはじめ欧米各地を旅したり本で読んだり、様々な住空間、建築作品に触れる中で、私たち日本人が当たり前と思っている住空間のつくりが、文化により随分と違うことにも気づくようになりました。この違いを理解することは、私たちが日常としている生活に多様性を与え、豊かな生活に結びつくのではないかと感じています。

２）キャリアパス

当初、弁護士になろうか、ジャーナリストになろうかとの気持ちから、大学では法学部に入学しました。しかし、授業を受け、新聞社などでアルバイトをするなかで、どうせなら自分の手の中で何かを作る仕事に就きたいと思うようになり、建築を学び直し、建築設計に携わるようになりました。設計事務所勤務を経てアトリエ事務所を自営するようになりましたが、学生時代から関心を持っていたアジアの状況が気になり、ラオスでラオス語の本を出版し、全国に本を読む楽しさを伝えるＮＧＯの立ち上げに係わり、年に何回かは

ラオスに通っています。さらに住空間やインテリアの設計の楽しさを若い世代に伝えたいとの思いから、専門学校や大学で授業を持ってきました。

このように書くと一見､ばらばらなことに携わっているように見えるかも知れませんが、住空間の設計は新しい生活の場を生み出す作業ですし、ＮＧＯ活動も学校での授業も、新しい時代を育てるという本質で共通しており、同じ方向性にあると思っています。

３）分科会の内容：「住空間デザインから文化を見る」

住空間をデザインする時には、そこで営まれる生活のイメージが必ずあって、プランニングがなされます。その生活のイメージはかなり多様で、今の日本人にとって当たり前の住空間と５０年前の日本人にとって当たり前の住空間は異なります。またアジアに住む人々にとっての当たり前も、欧米に住む人々にとっての当たり前も、それぞれの地域、文化で異なります。

今回の分科会では、住空間デザインの共通点と違いを意識し、それぞれの生活の多様性と豊かさを学びたいと考えています。

分科会は、最初に講師が数種の住空間例を取り上げ、その違いを考察した後、参加者がそれぞれ関心のある空間をいくつかの要素から分析し、住空間が想定している生活をイメージし、文化による共通性と違いを考えます。

可能なら自分の気に入った住空間のプランを持参してください。新聞に入っているチラシなどでも構いません。

４）キーワードリスト

領域性　分節と連続　視線

５）参考資料等

日本建築学会編　コンパクト建築設計資料集成[住居]　事例集部分
日本建築学会編　コンパクト建築設計資料集成[インテリア] 住居部分

memo

●分科会１（ワークシート）　（１日目 16:50～17:50）

各分科会の各セッションの内容や議論、疑問点やコメントなどを記入して下さい。

【内容・議論】
【疑問なこと／質問したいこと】
【コメント／自分で考えたこと　など】

●分科会２（ワークシート）　（２日目 8:30～12:00）

各分科会の各セッションの内容や議論、疑問点やコメントなどを記入して下さい。

【内容・議論】
【疑問なこと／質問したいこと】
【コメント／自分で考えたこと　など】

●分科会３（ワークシート）　（２日目　13:00～15:30）

各分科会の各セッションの内容や議論、疑問点やコメントなどを記入して下さい。

【内容・議論】
【疑問なこと／質問したいこと】
【コメント／自分で考えたこと　など】

●分科会４「中間発表」準備（ワークシート）　（２日目 15:30～17:30）

３日目の「全体発表」に向けて、『参加のしおり』（６～７頁）を参考に、グループでの議論を整理し、「中間発表」の内容や構成を考えて下さい。

【学んだこと】
【なぜ重要だと考えたのか（根拠）】
【提言・アクションプラン】
【コメント／自分で考えたこと　など】

●「中間発表」の相互評価（ワークシート）　（２日目 17:30～18:30）

次のような点に関して、相手グループから寄せられた質問やコメント、自分たちの反省点などを記入して、「全体発表」に向けた改善・修正の参考として下さい。

☆相手グループからのコメント・感想・意見など
発表内容と分科会テーマとの関連性：
発表内容の分かりやすさ・伝わりやすさ
発表の構成（学び→根拠→提言・計画）
発表者の態度や話し方：
発表資料の作り方や工夫：
提言や行動計画の妥当性・実現可能性：
発表時間の使い方：
その他：
☆自分のグループや自分自身の反省点・改善点など

●「中間発表」のチェックリスト（ワークシート）　（２日目 15:30～17:30）

下記のチェックリストを使って、相手グループの発表の「良かった点」や改善を要する点などを評価して下さい。

発表グループ：分科会＿＿＿＿　テーマ：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

評価に際しては、次の尺度を使い、該当する数字を「○」で囲んで下さい。			
１＝大いに改善余地あり	２＝もう少し改善の余地あり	３＝よい（少しだけ改善の余地あり）	４＝とてもよい

発表内容と分科会テーマとの関連性	1	2	3	4
ｺﾒﾝﾄ:				
発表内容の分かりやすさ・伝わりやすさ	1	2	3	4
ｺﾒﾝﾄ:				
発表の構成（学び→根拠→提言・計画）	1	2	3	4
ｺﾒﾝﾄ:				
発表者の態度・話し方	1	2	3	4
ｺﾒﾝﾄ:				
発表資料の作り方・工夫	1	2	3	4
ｺﾒﾝﾄ:				
提言や行動計画の妥当性・実現可能性	1	2	3	4
ｺﾒﾝﾄ:				
発表時間の使い方	1	2	3	4
ｺﾒﾝﾄ:				
	1	2	3	4
ｺﾒﾝﾄ:				
その他のコメントや感想など				

●「全体発表」準備（ワークシート）　（２日目 19:30～21:30）

「中間発表」でのコメントやアドバイス、『参加のしおり』（８頁）を参考に、「全体発表」の内容や構成を再検討して下さい。

【学んだこと】
【なぜ重要だと考えたのか（根拠）】
【提言・アクションプラン】
【コメント／自分で考えたこと　など】

●「全体発表」の相互評価（ワークシート）　（３日目 9:00～12:00）

各分科会の「全体発表」を評価して下さい。自分の分科会については自己評価をして下さい。

分科会Ａ	テーマ：
内容：	
あなたの疑問・コメント：	

分科会Ｂ	テーマ：
内容：	
あなたの疑問・コメント：	

分科会Ｃ	テーマ：
内容：	
あなたの疑問・コメント：	

分科会Ｄ	テーマ：
内容：	
あなたの疑問・コメント：	

分科会Ｅ	テーマ：
内容：	
あなたの疑問・コメント：	

分科会Ｆ	テーマ：
内容：	
あなたの疑問・コメント：	

分科会G	テーマ：
内容：	
あなたの疑問・コメント：	

分科会H	テーマ：
内容：	
あなたの疑問・コメント：	

●「研修成果と今後の課題」（ワークシート）

１．研修の成果（この合宿で何を学んだか？何を得ることができたのか？）

２．今後の課題（分科会の提言などを基に、将来のキャリア形成をどのように考えているのか？）

３．参加の感想・研修内容に関する要望など

●「リフレクション（ふりかえり)」(ワークシート)

「リフレクション」とはプログラムやセッションの内容やそこでの議論を「ふりかえり」、自分の「学び」や「気づき」を確認することです。今回の「合宿セミナー」を振り返って、あなた自身の行動や態度、理解度や達成度に関する以下の項目を自己評価して下さい。

自己評価に際しては、次の尺度を使い、該当する番号を〇で囲んで下さい。			
1=ほとんどできなかった	**2**=あまりできなかった	**3** =よくできた	**4**=とてもよくできた

分科会での議論や全体発表に向けたグループ活動に積極的に参加することができた。			
1	**2**	**3**	**4**
理由・根拠:			

講師の講話や問いかけに対して質問したり、自分の意見を述べることができた。			
1	**2**	**3**	**4**
理由・根拠:			

全体会や分科会のテーマや内容に関して理解を深めたり、関心を強めることができた。			
1	**2**	**3**	**4**
理由・根拠:			

自分の経験や意見をほかの参加者と共有することができた。			
1	**2**	**3**	**4**
理由・根拠:			

「働く」とはどういうことなのかについて考えることができた。			
1	**2**	**3**	**4**
理由・根拠:			

自分と地域社会や世界とのつながりについて考えることができた。			
1	**2**	**3**	**4**
理由・根拠:			

主体的に関わりたい分野を見つけ、今後の学びに向けたきっかけを得ることができた。			
1	**2**	**3**	**4**
理由・根拠:			

●担当教職員一覧

１）ゲスト講師（敬称略）：

秋元　信彦（株式会社パン・アキモト）
甲斐田きよみ（オーピーシー株式会社）
田面木千香（下野新聞社）
内藤　　靖（株式会社テラクリエーション）
野口　朝夫（野口朝夫建築事務所）
吉田　智子（日本コカ・コーラ株式会社）

２）担当教員

田巻　松雄（宇都宮大学国際学部）
重田　康博（宇都宮大学国際学部）
友松　篤信（宇都宮大学国際学部）
佐々木史郎（宇都宮大学国際学部）
倪　　永茂（宇都宮大学国際学部）
若林　秀樹（宇都宮大学国際学部）
湯本　浩之（宇都宮大学留学生・国際交流センター）

３）担当職員：

野澤　待子（宇都宮大学国際学部事務長）
山口　陽子（宇都宮大学国際キャリア・コーディネーター）

４）学生実行委員：

秋元明日香（宇都宮大学国際学部国際社会学科４年）
江連　祐希（宇都宮大学国際学部国際社会学科４年）
手塚　美希（宇都宮大学国際学部国際社会学科３年）
本間茉莉奈（宇都宮大学国際学部国際社会学科３年）

2013 年度国際キャリア開発プログラム「合宿セミナー」
事前学習資料集（「ワークシート」付属）

発行日：2013 年 7 月 25 日
発　行：宇都宮大学国際学部
編　集：国際キャリア開発プログラム委員会
〒321-8505　宇都宮市峰町 350
TEL: 028(649)5172 FAX: 028(649)5171
E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

大学	学部　　学科　　年
氏　　名	